

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	哲學の階級性 : 論文
Author(s)	三浦, 次郎
Citation	龍南, 203 : 35 - 47
Issue date	1927-12-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8966">http://hdl.handle.net/2298/8966</a>
Right	

# 哲學の階級性

三 浦 次 郎

意識は明かに存在に後れる（マルクス）。吾々の意識は物質の一發展段階に於ける產物であり、その屬性である。意識、思惟は決して物質を、腦髓をはなれて存在し得なかつたし、また存在し得るものではない。意識は物質を自然過程を特殊的には吾々の生活過程を反映し翻譯する。感覺を通じて外的存在は吾々に働きかける、そして理念が構成される。だから吾々の意識形態は如何にそれが超歴史的、超社會的と見えようとも、飽くまで歴史的、社會的、從つて階級的に規定されてあるものである。

生産力の一定の發展段階により一定の社會的生產過程、此の生産過程において必然的に生ずる人間相互の對立關係、この對立關係を表現するところの社會の形態に態應するところの精神及び一定の風習の狀態、而して此の狀態が生み出すところの諸能力や諸趣味傾向や諸嗜好やと一致せる宗教、哲學、文學、藝術——此の法式が生活過程とイデオロギーとの關係を示すものである。イデオロギー理念の發展は決してそれ自体として理解さるべきでなく、その説明は經濟的過程の推移の中に見出さるべきである。而もその説明たるや決して直接的になされうるものに非ずして、單に間接的にのみなされうるものである。更に又、イデオロギーの領域においては傳統は一つの保守的力であり、各階級のある時代における支配的理念は、その内容よりすれば該階級の社會的地位により決定されるにも拘らず、その形式に於ては、その前の時代において該階級或はその上級階級を支配してゐた理念と密接なる關係をもつてゐるといふことが特に注意されねばならない。各階級のイデオロギーは形式的には——その内容は完全に質的に異なるにしても——鬼も角、上流階級のそれを模倣する段階と、次にそれに對し意識的に叛逆する段階とに分けて考へられる。讀者の理解に便ならしめるために一例をとらう——

「十八世紀の一王國の平和なる臣民たる余にとりて、アテネもしくはローマの諸革命が何の關係があるか？余はペロポネス島の一暴君の死やオーリス港における若き女王の犠牲やにどんな興味をもちうるのか？余の見るべきものはない。余にふさはしき何等の道徳もない。」とボーマルシエはその著「眞正戯曲論」に論じてゐる。その「ペロポネス島の暴君」や、「オーリス港の女王」やは、實は色彩され理想化された上流社會の像であり、その歎賞する所であつた。同じボーマルシエは又言ふ「市民に加ふるにたゞ侮辱を以つてせよ、市民がその面に微笑を浮べ、國王が不幸を嘆ずる、これが唯一のありうべき舞台だと自分は聞いてゐる」と。彼等にとりては着飾つた騎士の戀や、燦然たる王冠の如きは何等の興味をも起させなかつた。それは憎惡と嫌惡との對象にすぎなかつた。そのボーマルシエと同時代のフランス人は、多かれ少なかれ、優れた地位にあり、進んだ文化藝術をもつ貴族を熱心に模倣したところの、又それ故にモリエール、シダナル、ダンクール等により嘲笑され、侮辱されたブルジョアジーの子孫に外ならなかつた。

次に哲學を見よう。

デカルトは「學校で教へる思辨哲學の代りに實踐哲學を置換える事が出来る。……そうすれば吾々の力や作用をそれか役に立つ一切のものに應用しそして自ら自然の主人及び所有主となり得るであらう」とて哲學の目標を確然と示した。當時において人は生産力の發展に十分の興味をもち得た事を人は哲學者をして語らしめたのだ。

## 一、世紀すぎる。

デカルトの説の論理的必然の歸結として唯物論が出現する。急進ブルジョアジーは此の新哲學の傘下に駛せ參ずる。痛烈深刻なる闘争は、あらゆる種類の觀念論多少とも從來の制度を美化する思想に對して戰はれた。「信仰」に對する「科學」、「暴政」に對する「自然法」、「隷屬」に對する「自由」、「迷蒙」に對する「理性」の闘争が。現實の苦痛に對する彼岸における幸福の約束により、人を眠らせる宗教に對して現實生活における自由幸福を要求して叛逆し、專制君主の暴政に、各人の内部に存在する自由平等を

求める自然(彼等は、これがブルジョアの生活過程により規定されたイデオロギーなることを知らず「自然法」と命名したのだ)を對抗せしめ、政治的束縛に對するに個人の政治的自由を以つてし、封建的階級に對して理性の女神を王座につけた。此れが封建制度を爆破すべくブルジョアジーの理論的闘争の戦士の言葉だつた。此の簡單なる言葉の中に吾々はブルジョアそのものの利益の表現を見ないだらうか。

かくの如く凡ての哲學は階級性を有するものである。イデオロギー一切の分野に同様の事が言はれうる。

## 二、現段階における唯物論と觀念論

「ブルジョア世界の足の下なる地盤が搖らぎ初めた時、社會的カタストローフエが始つた時、古き世界のイデオログ達は歴史を見逃してゐた事を思ひ出した。」だが歴史は最早や十八世紀の歩みをつゞけてゐなかつた。新しき方向に新しき歩を進めてゐた。それは人類を新鮮にし更新すべく歴史的に運命づけられたるプロレタリアートに顔を向けてゐる。歴史は革命の味方となり進化の友であつた。それはブルジョアに背を向けバリカーデの彼方に向つてゐた。もはやそれはブルジョアに忠實を示さなかつた。ブルジョアには最後の努力が始まる。世界を永遠なる理性的にして不變の体系とすることにより、吾々の經驗世界は假象であり、空虚であり、虚偽であるとし、恒久不變なる概念又は理念こそ眞の現實であり眞理であることに、革命より自己を防衛せんとする哀れなる努力がなされる。その努力こそ一系列の觀念論となつて現はれる。だが今度は科學の衣をつけて。だが空しき試みよ！

小ブルジョア相對論は——レーニンが指摘する如く——物理學が蒙りつゝある危機以外に、更に社會的諸原因によつて條件づけられてゐる。發達せる資本主義の時代においては、小ブルジョアジーは現實の地盤から引き離される。世界には確固たる、理性的なる何物もない。それは、如何にかして組織されなければならない所のガースである。小ブルジョアジーは此の世界と如何なる論理も、如何なる合法性をも發見しない。客觀的歴史的過程は、心理的體驗の流れによつて代置される。かくして「感覺」

「要素」等の旗の下にマツハ、アヴェナリウスを先頭に經驗批判論の追隨者達が騎首を並べて突撃を開始する——唯物辨証法に。プロレタリアの陣營に。

對立の二極にプロレタリアートの陣營がある。科學に内容づけられ、最も勇敢に大膽に現實の過程を分析批判する辨証的唯物論の戰陣がある。歴史の味方であり。文化の促進者であり、人間的幸福の眞の擔當者がゐる。そして觀念論、中間黨派の總攻撃を勇敢に撃退しつゝある。世界の飛躍はこゝで完成されつゝある。

現代の哲學上の傾向は以上の如くである。

「人が一つの哲學に對してとる態度は、その人が如何なる人であるかによつてきまる」(フイヒテ)

時代が異れば努力が異り、努力が異れば哲學も又異なる。問題は進展する。

### 三、唯物論的辨証法

哲學の根本問題は思惟と實有、思考と存在、精神と自然との關係如何の問題である。此の問題に對する答如何によつて哲學者は唯物論と觀念論との二大陣營に分れた。思考に對する存在の優越、思惟に對する實有の超越、精神に對する物質の支配を承認するもの、精神に對し物質の第一次性、本性性を主張するものは唯物論の陣營に赴き。之に反し物質に對する精神の本性性を主張し、從つて何等かの意味において超自然的な世界創造を假定するものは觀念論者として自己を結成した。エンゲルスはかくの如く思惟と實有と何れが本源的かなる問によつて唯物論と觀念論とを分けた。そして彼は言ふ、「本來唯物論、觀念論なるものはこれ以上を意味するのではない」と。かゝる規定は唯一の正しい規定であり、それによれば現代ヨーロッパの主なる哲學的潮流、價值なる永遠的超感性世界的規範を空想する所謂新カント派、眞理を排除し萬物を擬制により説明せんとするヴァイヒンガーの Altes 哲學、直觀により事物の本質を把握しようとなすフツサールの現象學、あらゆる現實を思惟の所産とするコーエンの汎論理主義等々の如く、それ自身一つの自然過程の所産たる精神を自然の創造主、主權者たらしめ、運動しつゝある現實を「汚

らはしくもその猶太人的な實在にまで墮落せしめ、精神の隷屬者たらしめんとするものは何等かの形の觀念論である。従つて彼等は唯物論の敵であり、その唯物論に對する敵意には歴然たるものがある。

「世界及び人類の歴史において——とゲーテは全く賢明に言つてゐる——他の凡てのものが從屬してゐるところの、本來の唯一の最も深刻なる題目は、不信者と有信者との争である」

幾分脱線した氣味がある、問題を進めよう。

× ×

では、現代の唯物論は？その發展過程に従つて説かう。

新しき唯物論は單なる唯物論——形而上學的唯物論ではあり得ない。それは辨証法的唯物論であり、眞に徹底せる唯物論である。それは又ギリシヤ以後の唯物論の最高の發展形態である。

ギリシヤのヘラクリトスは言ふ。

「萬物は在り又在らず、何となれば萬物は流動的で、常に變化し、常に生滅しつゝあるが故に。」

と。「自然界は辨証法の証明である」

自然科學は時々刻々辨証法に有力なる確証を提供しつゝある。吾々の身体それ自身すら無數の細胞よりなり、それは日々外界の物質を攝取して更新する。ある細胞は死し、他の細胞が新に生じつゝある。かくして「各生物体は常に自己であり、又自己以外のものである」といふ一見逆説的な命題も定立され得る。凡てのものは生成と消滅の過程において認識される。

此の思索法に對して確証を興へた者として吾々は先づダーケンをあげなければならない。彼の最大の功績は自然は決して同一の過程を反覆するものに非ずして、凡ての存在は長き發展行程の全連鎖の一環であり、人類も決してその始めから現在あるがまゝの形態で存在したものでなく、それは幾百萬年の進化發展の自然的產物なりと説明した點にある。此の説は從來のメタフィジカルな世界觀を一舉に粉碎した。獨逸の新哲學はかゝる精神の下に擡頭した。カントはニュートンの太陽系不動説及びその永久

存續説を破つて、それを歴史過程の結果となし、廻轉する星雲の大塊の中から太陽其他一切の遊星の生ずことを説き、同時に又太陽系の起原にしてかくの如きものである以上、その將來の死滅は必然の事だといふ結論に到達した。彼においては、宇宙の歴史は物質の變動の永久の過程として思惟された。此の限りなき過程において、新しき世界は發生し消滅し再び發生する。此の過程は時間においても空間においても無始無終である。自然の内面的法則に従つて分子は、自然が新しき体系を建設する材料として役立つために合一し分離する。宛も世界全体がこの過程の結果として生じ、秩序は再び混亂に復歸する。

然らばかゝる過程の根底に横たわる動力は何か？、カントにおいては、それは「相對抗する力の爭鬭である」と考へられた。

獨乙新哲學はヘーゲルに至つて初めてその盛時に達した。吾々こゝで唯物論の問題に暫らく立留まらねばならない。十八世紀の唯物論者達は、觀念論に完全に止めを刺したと信じた。古き唯物論は死んで葬られ、理性はもはやそれに耳を傾けようとしなかつた。ところが時勢は變つた轉向をとりヘーゲルの思辨哲學が發生した。十八世紀の唯物論者の矛盾——形而上學の故に起るところの——は却つてヘーゲルにより觀念論の方から解かれた。唯物論者達は輿論が世界を支配すると考へた。而してその輿論がまた社會環境の產物なることを知つた時彼等は當惑した。一步進む毎にその二律背反の泥濘に沈んで行つた。未解決のまゝ残された矛盾はヘーゲルにより「世界精神」の援けを得て解決された——只惜しむらくは思辨的、觀念的に。

ヘーゲル哲學は

第一に——「一切の有限的なるものは、それ自らを止揚するところの、その反對物に推移するところのものである。この現象は一切の現象に固有なる助けによつて行はれる、即ち一切の現象はその反對物を生み出す諸力を包含する。」

第二に——「與へられたる内容の漸時的量的發展は遂に質的差異に變革する。この變革の契機は飛躍、漸時性の中斷の契機である。人は自然及び歴史は飛躍せずと信ずるとき自己を欺く。」

となす革命的方面を持つ。此の哲學は一切のものの消滅性を証明する。此の哲學の前に存立するものは、凡べて生成と消滅と低きより高きに向ふ不斷の進化向上の過程であるにすぎない。かゝる自然過程の意識されたものが此の哲學である。此の哲學に

よれば吾々は決して絶対真理に到達し得るものではない。如何なる真理が見出されようと、それは相對的真理であり、客觀的絕對的真理に向つての接近であるにすぎないとの結論に導く、にもかゝらずヘーゲルに於いては吾々の理念は絕對理念（自然は此の絕對理念の外化したものである）とその内容に於いて相通するの故を以つて、ヘーゲル哲學において此の法則が見える事により初めて人類は絕對真理を認識したとの結果に陷つた。かくして歴史はその進行をやめねばならなかつた。これが此の哲學の保守的方面である。夫故に此の哲學はウィルヘルム三世時代の御用哲學として尊崇された。

だがヘーゲルで歴史は終らなかつた。新しき世界、新しき努力が現れた。抽象的な、難解な、退屈なヘーゲル哲學の後をうけて、封建的王制に叛逆するブルジョアジの理論的思想的代表者フオイエルバツハの哲學は一つの清涼劑として迎へられた。フオイエルバツハはヘーゲルを批判して言ふ。ヘーゲルは觀念的なものから現實的なものを、抽象的なものから具體的なものを導き出さうとする。然しかくの如きは決して事物を客觀的に認識しうるものではあり得ない。ヘーゲルはカントにより特に表明された實有と思惟との矛盾を揚棄してはゐるが、それは單に矛盾そのものの内部で——一つの要素の内部で——思惟の内部で揚棄してゐるにすぎない。唯心論は兩者の統一をもたらずどころか却つてそれを分割する。その一方を除去する事により統一し得たと信ずるその出發點——哲學の基礎原理としての「我」は誤つてゐる。あらゆる哲學の出發點は「我」たるべきでなく「我」及び「汝」たるべきである。余は余に對しては我であると同時に他人に對しては「汝」である。余は「我」であると同時に「汝」である。余は主体たると同時に客體である。かくして思惟と實有との統一性は証明される。こゝに附言すべきはフオイエルバツハの「我」は觀念論者の言ふ如き抽象的な存有でなくて、「我」とは實在的存有であり、感覺的實質的肉體的な存有が全体として「我」であるといふ事である。思惟し得るものは此の實在的存有であり、抽象的存有ではない。彼は言ふ——「實有と思惟との關係は次の如くでなければならぬ。實有は主語であり、思惟は客語である。實有は自己から出で自己によりて存する。……實有はその理由を自己の裡に持つ。」と。

「唯物論は——と彼はまた言ふ——余にとりては人間の本質及び知識の建物の基礎である。」客體は彼においては感性の對象たる



のみならず、又實にその基礎でもあつた。かくして彼の唯物論は「神學的附加物を脱却せるスピノザ主義で」ある。此の哲學はヘーゲル哲學の單なる否定であり機械的反撥に止まり、それを揚棄するに至らなかつたとは言へ哲學史上に偉大なる功績を残したのを彼のために祝福してやらねばなるまい。

こゝでフオイエルバッハの不徹底さ、従つて誤謬の一部を瞥見しておかう。

「神はわが第一の思想であり、理性はわが第二の思想であり、人間はわが第三の思想であつた」とのべて人間の思惟が頭腦の作用によるものなる事を示した。それまでの彼は極めて正しい方向に進んだ。そして彼は又「神は理論の暗夜である」「神は理論の欠乏に代置せられる概念である」と言つた時も正鵠をえてゐる。然し「神は人間的實體の外化したものであり、それ自身感性的實體なり」と言ふ時、その人間なるものが抽象的個人であるが故に誤つてゐた。そして宗教は愛による結合なりとする時最も大きな誤謬を犯した。もし練金術が賢者の石なくして存在し得たらば彼の説は正しかつただらう。その道德論においても宗教論におけると同様無意識的に觀念論へ推移してゐたのである。兎も角批判を天上より地上に引下ろされたものは注目しなければならぬ。

ヘーゲルの辨証法とフオイエルバッハの唯物論とにより、凡ての事象の矛盾なき解決のための條件は準備された。その時に現れたのがマルクスその人であつた。

フオイエルバッハにおいては感覺、感受、直観は對象に關する思惟に先行する。かゝる事情を念頭におきつゝマルクスは言ふ「從來の一切の唯物論の——フオイエルバッハのそれをも包めて——主要欠陥は對象即ち實在性が感覺性が、單に客觀もしくは直観の形式の下にのみ把えられ、人間の感性的活動、實踐として、即ち主体的に把へられない點にある」と。マルクスにおいては自我が客觀を認識するのは、前者が後者に影響を與へるがためである。此の考へは、此の論文の冒頭に引用した「意識は明に存在に後れる」といふ彼の思想と鋭く對立する如く讀者には見えるだらう。だが實はそうでなく却つてよく調和してゐるのである。蓋し此の場合彼は客体の働きかけによりて吾々が事物を認識するといふ如き分りきつた事を言ふのが目的ではなく、かゝる

感覺により吾々がかかる客体に對する意識的行動に誘致されるといふ主要なる彼の思想を示すのが目的だつたのである。だから彼はフオイエルバツハ論項の十一に言ふ「哲學者は世界をいろ／＼に解釋したにすぎない、だが重要な事は世界を變革する事である」と。彼の言ふ如く「人間は彼れの外部にある自然に働きかけ且つそれを變革する事によつて、同時に彼自身の本性を變革する。」マルクスにおいては人はフオイエルバツハにおける如く抽象人ではなく、現實的社會の中に生きる人であり社會人である。彼によれば神なるものはフオイエルバツハと異り、「人間の自己感性であり、自己意識であり」、従つて「社會關係の空想的再現」である。唯物論は眞に地上に根を下ろす事を得た。

一方彼は「頭で立つてゐる」(マルクス)ヘーゲルの辨証法を足で地上に立たしめたのである。自然はヘーゲルの所謂辨証法的に發展し、それは吾々の思惟に反映する。思惟過程は自然過程の反映であり、それ自身も亦、従つて辨証法的法則をもつ。

かくて辨証法的唯物論は唯物論の最高の發展形態となり、自己の正當性を完全に立証するには至らないが、凡ての種類の觀念論を駁撃するには十分有力なもの」となり新世界の擔當者プロレタリアートの科學となつた。

#### 四、觀念論の諸形態の批判

次に觀念論に眼を轉じよう。

先づ主觀的觀念論から始めよう、その首領バークレー僧正は言ふ、

「人知の對象を考究する人には誰にも、その對象は現實に感官に映じた觀念であるか、それとも感情又は心の働きに訴へることによつて知覺される觀念であるか、或は更に記憶や想像の助けによつて形づくられた觀念であるか、その何れかであることは明かである。……例へば一定の色、香、味、形、密度が一緒になつてゐるものとして觀察されて——一個の限定された物として認められ、林檎といふ名で表はされる。また別の觀念の集合は、石、木、本その他同様の具象物を構成するのである。……」そして此の敬虔なる哲學者は「觀念又は知識對象」と並んで、これらを知覺すべき「心、精神、靈即ち我」があると述べ、觀念

はそれを知覺する心の外に存しないと結んでゐる。バークレーによれば物又は体とは觀念の綜合である。だから彼は、吾々の意識外の實在、吾々に未だ知られざるものの客觀的存在を承認する唯物論者を責めて、

「實際に於いて客體と感覺とは同一であるから、一を他から抽象することは出来ない。」「印象されないであつて何等かの觀念或は感覺或はそのコンビネーションが存在出来ることは余りに無稽ではないだらうか？」と威丈高に言ふ。時間と空間との具體性を否定する此の哲學こそ欺瞞であり遁辭であり病的な幻想である。もしマリヤの處女妊娠が事實であつたならば、プラトニックな戀で子供が生れるとすればバークレー僧正は救はれよう。けれどもさうした事がない限り彼の説は觀念の遊戲であり、真理の敵である。憤りに燃えた彼は自働人形の亂舞にその哀れをとどめる。

他の個所でバークレーは又「私は諸君——唯物主義者達——と同様に、どうでも何物か、外から吾々に作用すると斷言する。さうすれば我々とは根本的に異なるものに屬する力、(我々の)外にある力の存在を否認しなければならぬ。……」と言つて客觀的觀念論に一步踏み出してゐる。然り、自働人形は過去の運動でこわれかけたのだ。不徹底さは彼においてもその片鱗を窺ひ得る。

バークレー僧正の説と親族關係を結ぶものに、「物それ自体」の認識可能性、時間、空間、原因性の客觀性を否定するカント主義がある。カントの哲學は極めて不徹底で唯物論と唯心論との調停、調和を夢みる點にその核心がある。だから彼の哲學は「右から」「左から」も批判されてゐる。今吾々は彼の「物それ自体」論について簡略に述べよう。吾々の意識外に客觀的實在の存在を認容するが、それらを永遠に知られざるもの、或は只信仰によりてのみ認識されるものとし、(カント)また吾々の外界に存在し、而かも何等知悉されない世界に關する問題から、我々は何等かの哲學的障壁を以つて隔絶し得るし、またせねばならぬとする(ヒーム)不可知論の一系列は何とすばらしい觀念論の一形態であることよ！ 彼等の門弟達が如何に辯護しようとも現象と「物それ自体」との間には何等の原則的差異は存在し得ない。相違は只知悉されたものと、まだ知悉されないものとの相違にすぎない。従つて此の兩者の間に特殊の限界を設ける哲學的考察は吾々の知識を経験の彼岸に局限し、彼岸の眞理を設定せんとする

無稽な舌縫れのした哲學でなければ意識的な虚偽であり、欺瞞である。唯一のそして、最も有力なるかゝる學說に對する反駁は實踐である。エンゲルスが「フオイエルバツハ論」の中で言ふ様に西の根にあるアリザニンは「物それ自体」であつた。それはコールタールから製出されるに至り「我々のための物」となつた。かくて日々科學は「物それ自体」を「吾々のためのもの」と變化しつつある。

マツハは「物又は体は感覺の合成なり」と言ひ、アヴェナリウスは「物又は体は感覺の群なり」と言ふ。マツハ主義者は物質經驗の概念を曖昧ならしめ、「要素」なる新術語を發見し、原理的同格を云爲し、科學の言葉を用ふる。だが惜むべし、バラはやはりバラの匂ひがする。形を變へ色を變へても觀念論は觀念論であり、それ以外の何ものでもあり得ない。もし物体がマツハの言ふ如く「感覺の合成」であり、アヴェナリウスの言ふ如く「感覺の群」であるならば、全世界は私自身の表象にすぎないといふ結論が出る。そしてその前提からは自分以外の人の存在に到達する事は不可能となる。一步々彼は現實を見棄てて、自己の純粹思惟の通りに世界を作らうとする。だがそれはマツハ主義者には出来る筈がない。

「一度斜面に立つや否や、人は何と容易に而も輕快に滑りおちる事だらう！」（エンゲルス）、然リマツハ主義者は獨在論の深みに向つて一瀉千里その疾驅を續けてゐる。ヒューム主義に於いても同様である。兩者ともその論説は、無味乾燥なる不可知論の謔言の繰り返しにすぎない。此等の大先生達は、彼等が現實の國のすぐ前で立ち止る事により、或る階級の奉仕者となり古き世界の讚美者となつてゐる事を知つたなら驚くに違ひない。

## 五、結 論

「ミウルヴァの梟は黄昏にとび始める、（ヘーゲル）古き世界の日没が歴史の地平線に明かに示された時、社會の矛盾が現實に曝露された時、古き社會に間隙が生じた時、新しき階級が歴史の舞台に登場した時、その時だ。その時こそ新しき階級はその思想家、イデオログを送る。彼等ははその階級の原理と世界觀との上に立ち、古き世界の殘存物を批判する。彼等はあらゆるものを

大膽に認識し、現實の荒れ狂ふ波浪の中に勇敢に沈潜してそこに新しき生活の原理を、新しき變革の理論を發見する。それは純粹思惟から出發するものでなくして、現實の生活の血と肉で構成され、あくまで具體的であり、此岸性をもつ。彼等は新しき原理、新しき認識の方法を見出しそれを凡ての世界に擴張する。蓋しその階級は又それ自らの世界觀をもつから。こゝでは哲學者は「最も危險な、最も徹底的なそして最も決定的なる革命家である。」（ヘーゲル）凡ての價値の再評價があり、凡ての存在の再批判がなされ、それは變革に導く。

マルクスはブルジョア世界の日没にとび始めた。彼は眞理はあくまで具體的であり、現實的であるべきを示して、尖鋭なる批判の矛を宗教に、哲學に、政治に、經濟に——凡ての古き生活の分野に向けた。社會關係總体の革命的再批判はなされ始めた。多くのそれに續く實踐と相俟つてマルクス主義は生活の唯一の原理となり、變革の指針となつた。革命理論は革命階級の心となり心臓と化した。

嘗つてブルジョアの世界をロゴスが驅けまわつたのは前に記した。そのロゴスは今尚ほ彼の腦裡に君臨し續けてゐる。社會の發達はそのロゴスをますます現實より遊離せしめた。ブルジョアの官許奉仕者は純粹思惟抽象的眞理から生活の原理を抽出する。その現實との矛盾は科學的技巧により緻密に彌縫される。その言葉が科學の最後の言葉であるかの如く見える。また彼等自らかく教へる。だがその科學なるものは何か？それこそ物質に對する形而上學的觀念を、相對主義のために無慘にも破碎され、その結果彼等の遁れこんだ避難所なのだ。最後まで頑固なデマゴグ諸士の住家なのだ。死滅しつゝある階級の最後の努力はその中に呈露されてゐる。

物質、外的世界、激甚なる階級闘争、革命の嵐——これら凡てを虚偽であり、假象であり、幻影であるとするのが何を意味するかは最早や讀者には十分明であらう。

以上の論及により吾々は從來不可侵領域と目された哲學の領野に階級性の捺印を見た。主觀的觀念論の夢遊病、中間黨派の現象への追隨——それらはブルジョアと小ブルジョアのはかなき努力である。けれども客觀世界から生れ出づる感性的刺戟は、

吾々をかくる混沌と昏迷と虚偽とから救ひ出さずには居ないだらう。歴史は何時まで目的論的説明に従順にゐはすまい。やがて此の論争は實踐により解決されるであらう。その時二十世紀のドンキホーテは迷ひからさめずにはゐられまい。蓋し「感覺の流れから歴史は生れない。」(マルクス)から。

(一九二七、一〇、四稿了)